

# ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団

2007(平成19)年7月16日鑑賞〈梅田ピカデリー〉

★★★



監督=デイビッド・イエーツ/製作=デイビッド・ヘイマン/原作=J・K・ローリング/  
脚本=マイケル・ゴールデンバーグ/出演=ダニエル・ラドクリフ/エマ・ワトソン/ルパ  
ート・グリント/イメルダ・スタウトン/イバナ・リンチ/ケイティ・リュウ/マ  
イケル・ガンボン/マギー・スミス/アラン・リックマン/ロバート・ハーディー/レイ  
フ・ファインズ (ワーナー・ブラザース映画配給/2007年アメリカ映画/138分)

## 第1章

シリーズ物がいつぱい

……『ハリー・ポッター』シリーズも早や第5作。そこでハリーも5年生に進級、のはずだったが……？ 新登場は、ピンクの服を着た防衛術の新任教師だがこれが曲者で、「魔法学校の自治」が大きな危機に……。生徒たちは実践的な防衛術を学ぶため、ダンブルドア軍団を組織して、魔法学校の自治を守るための闘争を展開！ そして遂にクライマックスでは、ダンブルドア校長と悪の権化ヴォルデモートとの対決も！ 第5作の見どころは、ざっとそんなところだが……。

## 🎬 聖書、毛沢東語録に次ぐ販売3億冊！

2007年7月14日付毎日新聞夕刊は、世界的ベストセラー『ハリー・ポッター』シリーズの最終巻となる第7巻『ハリー・ポッターと死の秘宝（仮題）』が7月21日、世界で一斉発売されたことを報じた。これによって10年間に及んだシリーズが完結するが、第1作『賢者の石』以来の販売部数は3億冊を超し、聖書や毛沢東語録などを除けば史上1位になるとのこと。そこで、小見出しも「聖書、毛沢東語録に次ぐ販売3億冊」というすごいものに。

さらに大きい見出しは「経済効果も最高潮」というもので、その販売部数は最終的に4億冊、売上高は80億ドル（約1兆円）に達すると予想されるとのこと。また、映画の収益力も並外れて高く、第1作～4作までの興行収入は35億ドル（4300億円）で、史上最高のジェームズ・ボンドシリーズ（45億ドル）を抜くのは時間の問題だと

のこと。さらに本と映画の上に、DVDやビデオなどの関連商品を加えるとそれだけで2億円が視野に入るが、経済効果はこれにとどまらず、ホグワーツ魔法学校やオックスフォード大学の「クライストチャーチ」の観光収入でゆかりの地は大いに潤っているらしい。そのうえ1つの社会現象として、『ハリー・ポッター』シリーズは英国の全寮制学校の伝統に光を当てたとのこと。

私は毎日新聞、朝日新聞、読売新聞、日経新聞、産経新聞の5紙について毎週金曜日夕刊の映画に関する記事はすべて丹念に読んでいるが、この毎日新聞夕刊の記事の視点と豊富なデータには感心。ロンドン駐在の藤好陽太郎記者に拍手を送りたい。

### 先行上映はガラガラ……。これで大丈夫……。？

『ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団』の全国一斉公開は7月20日からだが、7月14日（土）、15日（日）、16日（祝）の3日間先行上映されたため、私は16日の6時20分からの回を観ることに。ひょっとしていっぱいになるかもと考えて、1日前に座席券をとっておいたのだが、実際に行ってみると、大劇場の中の観客はわずか30名程度でガラガラ……。夏休みになれば家族連れでガッポリという計算をしているのだろうが、これで大丈夫……。？ ちょっと心配……。

### 今回の嫌われ役は、あの……。？

『ハリー・ポッター』シリーズ第5作『ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団』では、『ヴェラ・ドレイク』（04年）等での名演を誇るイギリスの名女優イメルダ・スタウトンが「ピンクを着た悪魔」ドロレス・アンブリッジとして登場し、やさしい笑顔とソフトな声に似合わぬ嫌われ役を堂々と（？）演じている。これが超ハマリ役！ちなみに、彼女は私が7月22日に観た『フリーダム・ライターズ』（07年）でも、抵抗勢力の代表としてエリン・グルーウェルと対立する国語の教科長を演じていたから、最近嫌われ役志向……。？

アンブリッジは典型的な魔法省の官僚タイプで、魔法大臣コーネリウス・ファッジ（ロバート・ハーディー）にゴマをすって（？）、ホグワーツ校の支配を狙っていた。第1作以来ホグワーツ校の校長を務めているアルバス・ダンブルドア（マイケル・ガンボン）は、自主独立路線派で、自由な校風を尊重するタイプだから、秩序と統一を重んじ、何でも規則で縛り、上からの押しつけ教育を施そうとするアンブリッジの気

に入らないはず。

そして、アンブリッジが防衛術の新任教師としてホグワーツ校に赴任してくると、生徒たちに対する締めつけ教育が始まったのは当然。それによって、アンブリッジと生徒たちとの間に対立が生まれてくることに……。

## 5年生となるハリーの憂鬱は……？

第1作でロンやハーマイオニーと共に初々しい表情でホグワーツ魔法学校に入学してきたハリー（ダニエル・ラドクリフ）も、今や5年生への進級を心待ちにしている年齢に。ところがこの映画の冒頭は、楽しいはずのハリー・ポッター映画に似合わない、意外に憂鬱そうなハリーの姿が……。

第4作では、ハリーの父親ジェームズ（エイドリアン・ローリンズ）を殺害した悪の権化ヴォルデモートがはじめて登場した。ヴォルデモートが人間の姿となって復活し、ハリー・ポッターと対決することになったのが、第4作最大のハイライトだった。そんな命がけの対決にハリーがそれまで学んだ魔法を最大限活用したのは当然だが、ホグワーツ校はそんなハリーに対して、学校外で魔法を使ったことを理由に5年生への進級を拒否し、学校から除籍すると通知してきたからハリーはビックリ。ハリーは吸魂鬼（ディメンター）の攻撃から自分を守るためだったと弁明したが、さてそれが容れられるのだろうか……？

それが、第5作導入部のハラハラドキドキの物語となるからそれに注目するとともに、微妙な権力状況の変化をしっかりと観察したいもの……。

## 第5作のニューフェイスはチョウ・チャンとルーナ・ラブグッド

シリーズ5作目ともなれば新陳代謝が必要で、第5作では嫌われ役としてアンブリッジを登場させたいえ、さらにフレッシュなニューフェイスを……。

第1作からずっと続いていたハリーの親友は、ハーマイオニー・グレンジャー（エマ・ワトソン）とロン・ウィーズリー（ルパート・グリント）の2人。第4作における新顔は、三大魔法学校対抗試合でホグワーツ校の代表選手となったセドリック・ダイゴリー（ロバート・パティンソン）だったが、彼は「悪の権化」ヴォルデモート卿（レイフ・ファインズ）によって殺されてしまうことに……（『シネマルーム9』20頁参照）。そこで第5作では、新たにチョウ・チャン（ケイティー・リュング）とル

ーナ・ラブグッド（イバナ・リンチ）という2人の美女が登場！ そんな中、遂にハリーとチョウ・チャンとの間でのファーストキスのシーンが登場するのが大きな話題だが、別に私にとってはそんなことはどうでもいい……？

## ホグワーツ魔法学校の自治とは……？

私が学生運動をやっていた今から30数年前の「佐藤訪米阻止」「ベトナム戦争反対」などの政治課題と並ぶスローガンは、「大学の自治を守れ」というものだった。大学の自治の象徴は、1933年の京都大学における「滝川事件」。これは、内務省が刑法学者滝川幸辰の著書を、その中の内乱罪と姦通罪に関する学説を理由として発売禁止処分とし、さらに文部大臣が滝川の罷免を要求したことに對して、京大法学部教授会が猛反発し、全教官が抗議の意思を示すべく辞表を提出したという大事件。この事件はその後複雑な経過をたどったが、これが私の大学時代における「大学の自治を守れ」の学園闘争の原点にあったもの。もちろん、1960年代後半におけるその闘争の姿は大きく様変わりしていたが、教育内容はもとより、人事・財政に至るまで文部省（現在の文部科学省）の介入を許さず、それを必要最小限に留めようとする闘争であったことは同じ。そんな思いで今、ハリーたちが通っているホグワーツ魔法学校を見ると、そこには重大な「大学の自治」の危機が……。

## ダンブルドア軍団の結成——実技は自分たちで！

防衛術の新任教師として赴任してきたアンブリッジの教育方針は、「生徒たちに魔法の実技は必要なし。理論だけをマスターすればよい」というもの。したがって、教室の中は知識の詰め込みとテストの連続。

これに對して最初に抗議したのがハーマイオニー。有志を集め、自主的な勉強会を結成しようとした彼女のオルガナイザーとしての発想力と実行力は大したもの。さらに、勉強会には教師が必要なところ、その教師には第4作で悪の権化ヴォルデモートや吸魂鬼（ディメンター）と現実に闘った経験のあるハリーがピッタリということになり、遂に秘密結社ダンブルドア軍団が結成されることに。迫りつつある闇の勢力から自分たちを防衛するためには、実践的な呪文の唱え方の習得が不可欠であることを理解した生徒たちは、ハリー先生の指導の下、月月火水木金金の訓練を……。

このように『ハリー・ポッター』第5作は、魔法学校の自治を守り、闇の勢力に對

抗するための実践的な防衛力を学ぶ生徒たちの革命的な闘争の姿をダイナミックに描いていくことに……。

## クライマックスは、善と悪の対決……

第5作で、冒頭からずっとハリーが学校からも生徒たちからも疎んじられているのは、第4作でハリーが体験した悪の権化ヴォルデモートを中心とした闇の勢力との闘いの話を誰も信用しなかったから。

ヴォルデモートの登場を信用しないのは、魔法大臣のファッジも同じ。したがって、魔法大臣の権威をカサにきて、ダンブルドア校長からホグワーツ魔法学校の実権を奪い、実効支配しようと狙っているアンブリッジ教師も当然。このように、アンブリッジはいわば平和外交・非武装中立で大丈夫と思っているわけだから、防衛術の教師であるにもかかわらず、実践は不要、理論で十分という指導方針になっているわけだ。しかし、誰も知らない間に闇の勢力は近づき、ついにホグワーツ校を襲ってくることに……。

そんな中、第5作のラストでは、遂にダンブルドア校長と悪の権化ヴォルデモートの世紀の対決というクライマックスシーンが登場することになる。その対決シーンの視覚効果や映像処理が第5作最大の見どころだが、それについてのあなたの評価は……？ そして、その闘いの行方は……？ それは映画を観てのお楽しみに……。

2007(平成19)年7月24日記